彙報

日本心理學雜誌發刊

東西兩大學の心理學教室及び京都の生理精神兩教室に於ける研究者を中心として「日本心理學雜誌」なる純研究的季刊雜誌が公刊せらるることになつた。趣意書に曰く、

「私どもは、いま「日本心理學雜誌」といふ季刊の一雜誌を發行しやうとしてゐます。

此雜誌の主要なる目的は一般心理學並びに特殊心理學者くは之と緊密な關係に立つ諸科學上の研究の發表機關たるにあります。併せて、心理學上の諸問題に關して實施せられた諸研究の抄錄をも收錄したいと考へてゐます。要するに、我國に於ける心理學の自發的研究に對して索引の資料となり報告の機關となるといふことが本誌の全目的であるのであります。

我國の心理學の現狀を省みてみまするに、最近十年間に於ける進歩の過程は確に顯著なる者でありますけれども、其進歩の大半は歐米に於ける斯學の發達に依持せられて居るのでありまして、眞の意味に於ける心理學的貢獻は實に數ふるに足らぬものであります。言はゞ我國の心理學はまだ到底「模倣」と「飜譯」の時代を脱し得ないのであります。でありますから、假りに心理學上重大なる貢獻がありましても、それは一旦歐米の學界に向けて輸出せられ、然る後更らに逆輸入せらるゝのでなければ、殆んど其價値を具へない狀態にあります。況んや、幾多の研究報告に至つては「飜譯」と「模倣」との下に壓抑せられてしまつて、其眞摯なる努力は空しく塵埃と見棄てに埋もれてしまふ現狀であります。

私どもは實に斯の如き心理學の現狀に平かなる能はざるものであります。勿論「模倣」や「飜譯」も極めて必要なことではありますが、唯々歐米の學界の進轉するがまゝに追隨して行くといふことは到底堪え難いところであります。私どもは、此意味に於て我國に權威ある學界の樹立を要望せずに居られませぬ。然して、これを樹立すべき責任が私どもの肩上に在ることを自覺するならば、今の時に當りて發憤し努力するより外に道は無いと思ふのであります。

現今の社會はあらゆる事象に向つて改造と新生とを要求して居ます。蓋し、我國に於てのみならず、歐米に於ても此欲求は澎湃たる一大思潮流であります。これ欲求即ち自覺であり、自覺即ち欲求であるからであります。私どもの心理學に對する欲求も亦同じやうな意味があるものであると確く信じます。

敢て多言を必要としませぬ。右に申し上げましたやうな理想に對して、此「雜誌」が私ども自らの翼となり、同時に權威ある心理學界の樹立に對して何等かの寄與を有するものとなりますならば、私どもの望は足るのであります。更らに此「雜誌」に由つて私どもが我國に於ける未知の心理學研究者と握手し其研究の發表に幾分の力を致すことができるならば何よりの滿足であります。

私どもは、私どもの目的を了解し贊同して下さる方々の力に由つて此「雜誌」を維持してゆきたいと考へてゐます。」

雜誌内容は原著と抄錄の二種に限り、原著は研究報告、抄錄は各

種の研究問題に關する文獻の摘要である。毎年一月四月七月十月を以て定刊の豫定であるが、本年に限り、七月に第一號を創刊し、十二月迄に四册を完結するさうである。吾人は切にその健全なる發達を希望して已まない。(因に、雜誌(年二圓)希望者は京都帝國大學文學部心理學教室內同雜誌社に申込まるべしと。)

新刊紹介

佛教概論

金子大榮著

佛教概論とは如何なるものであるか。それを問ふ前に我々は先づ著者と共に佛教概論とは如何なるものであるべきかを問はねばならぬ程古來佛教の名の下に現はれたる諸思想は多端にして複雜である。併し佛教を概論することの困難は單に教義の複雜にして宗派の多岐なるによるのではない。佛教概論が如何なるものであるべきかの問題は要するに佛教の根本精神が何であるかを捕捉することの困難に起因するのである。故に佛教概論の問題は第一に佛教の根本精神が何處にあるかを問ふことであり第二に佛教の根本精神が何であるかを研究することであり第三に佛教の根本精神が如何にして體得せらるゝかを修學することでなければならぬ。著者は夫々此等の問題に答へて教相學と教理學と修道學とを以て本書の內容を構成してゐるのである。併し此等の三問題は互に如何なる關係を有するであらうか。佛教の根本精神が何處にあるかを知る爲には少くとも論理的には其根本精神の何たるかを知つてゐなければならぬ然らざれば佛教概論とは單に形式を異にせる諸宗綱要の羅列にすぎぬものとなるであらう。或は佛教の根本精神は此等諸宗派の未だ分裂せざる原始佛教にあると考へる人もあるであらうが單なる歷史的研究からは價値の批判は生じない。歷史的に原始なるものが卽ち本質的であると考へる人は發生法と批評法とを區別し得ぬ人である。原始佛教の根本精神であることを主張する前に何故にそれが本質的であるべきかの理由が明かにせらねばならぬ。此意味に於て大乘は非佛說でなく大乘こそ眞の佛說であるといふべきであらう。されど佛教の根本精神を知るは如何にして可能であらうか。佛教は單なる理論に非ずして宗教である。佛教の何たるかを知るには自ら之を體得する道を修めねばならぬ。佛教の根本精神は眞に佛道を修學し得たる人によつてのみ體得せらるゝからである。茲に於て教理學は修道學を基礎とすべきことが明かになつた。しかも修道學は躐つて再び教相學の上に立つのである。何となれば佛道を修するには先づ其道の何處にあるかを知らねばならぬからである。故に此等三種の學は互に無關係ではない、究極に於て一に歸すべきものである。佛教概論はあらゆる教學を綱羅し折衷するものではなく此等三種の學の畢竟して一致すべき點を究明するものでなければならぬ。佛教の根本精神が何處にあるかを看破してそこから教相を判釋し教理を統一するのでなければならぬ。單に理論的に統一するのでなく之によつて宗教としての眞生命を開顯するものでなければならぬ。此意味